



# NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2010.5.1発行 NO.13

社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

## （巻頭言） 日本の保育・子育てのグランドデザイン（Ⅱ）

本研究機構では、「日本の子育て・保育のグランドデザインについての研究」を、汐見稔幸氏（白梅学園大学学長）を中心とする研究チームに委託しました。

政府の動きが急テンポであることを考慮して、5月末までに第1次提言を、9月末までに第2次提言を、とお願いしています。お断りしておきたいのは、ここで出される提言がイコール全私保連の提言とはならないということです。研究チームの主体性を尊重して、研究チームからの提言として社会に公表できるし、その報告を受けてその全体または一部を全私保連の提言とすることもできる、そういう位置づけとしています。

この原稿を書いている4月10日時点で、研究会は4回の会合を持っており、普光院亜紀（保育園を考える親の会代表）、尾木まり（子どもの領域研究所所長）、塩崎美穂（お茶の水女子大学講師）、櫻井慶一（文教大学教授）の各氏から提案を受けました。神原文子氏（神戸学院大学教授）からの提案も予定されています。汐見氏とともに全体のとりまとめに動いていただいているのは、萩原久美子氏（生活経済政策研究所主任研究員）です。どんな方向での検討がされているのか、陪席している私が受けとめたこの研究会での議論の輪郭を、ご紹介したいと思います。

議論の大前提は、「とにかくにも幼保一体化」ではなく、今の日本の子どもが置かれている現実をとらえることと、そのうえに立って、今何が必要かを問うことから出発しようということです。

そのとき浮かびあがってくる一つの大きな問題は、子どもの貧困の問題です。必ずしも経済的な貧困だけでなく、さまざまな事情から生活が崩壊の危機にある家庭で育っている子どもも含まれます。

それらの子どもに対する社会的なセイフティーネットをしっかりと構築することが重要で、その一部として保育所が担うべき福祉的機能が十分に機能しているか

どうか問われなければなりません。

「福祉」という場合、「ウェルフェア」から「ウェルビーイング」へという流れがありますが、その流れの中で、「ウェルフェア」に相当する部分が軽視されがちになっているということはないのでしょうか。

私は、まだ十分に理解できていないのですが、ヨーロッパでは今、「ソーシャルインクルージョン」という概念が主流となっているとのことです。

「インクルージョン」は「エクスクルージョン」の反対概念です。つまり、「社会的排除」の反対概念として「社会的包含」とでもいったらよいのでしょうか。

ここでいう「社会的排除」とは、さまざまな事情から市民社会に参加できない状態に放置することを意味しており、そういう人たちをも社会的に包摂していくこととして、「ソーシャルインクルージョン」という概念が使われているようです。

最終的に、こういう言葉を使うかどうかはわかりませんが、グランドデザインを考える際に、「原点としての福祉」を基盤に据え、人間としての尊厳を確立すること、主体性を重んじること、自己決定の原則など、全人格的なものを理念の核に据えるべきなのではないかという議論がされています。

イギリスのブレア政権は、基本的に新自由主義的なところを残しながら、セイフティーネットづくりを徹底してやろうとした、そのイギリスの経験に学ぶ必要があるという議論も出されています。

その一環として子どもの分野で展開されてきたのが「シユア・スタート」施策であり、その具体化されたものが「チルドレンズセンター」ですが、そこは、子どもの生活の場であることを基盤に、教育、ケア、保健、家族支援を統合したコミュニティーセンターです（「保育通信」2010年1～3月号・「イギリス保育視察研修報告」参照）。

櫻井氏は、「保育所への役割期待・中心的機能」は、60～70年代に展開した「狭義の幼児教育機能」、80年代に浮かびあがった「就労支援機能」、90年代に少子化対策の一環として進められた「地域子育て支援機能」が重層的に拡大深化してきたが、2000年代に入って、虐

待・子どもの貧困問題の顕在化に伴って「地域家庭生活支援機能」がさらに求められるようになったとする、興味ある図を研究会で示されました。

今まさに、そういう時代にあるという時代認識が必要なのだらうと思われま

(遠山洋一●東京・パオバブ保育園ちいさな家園長)

## 実践

# 「生活の連続性」というアナログな世界を 保護者とどう共有するか

### ■「生活の連続性」とは

子どもの園生活は、「生活の連続性」というアナログな世界です。

一時期、映像で子どもの姿を職場の保護者に伝えることが話題になりました。映像は、確かに写真と違って、アナログとして子どもの姿を眺めることができます。しかし、実際は、職場でずっと子どもの姿を眺めているわけにはいきません。画面に、わが子の泣いている姿が映ったとすると、保護者は「あっ、わが子が泣いている！」とその姿を一瞬の場面としてとらえます。ですから、園がアナログとして子どもの姿を伝えようとしても、保護者は子どもの姿をデジタルとしてとらえてしまうのです。

しかし、保育とは、その子がどうして泣いたのか、泣いた後、どうなったのか、泣いている間に、他の子どものようなかわりもったかなどが大切なのです。

このように考えると、保護者と保育を共有していくということは、いかにアナログな世界である保育、子どもの姿をアナログとして保護者に伝えるかということが大切な気がします。それは、子どもの送迎の時の保護者との会話でも行われていることでもあり、お便り帳の中の保育士の記入の内容からも伝えていきます。



### ■行事の課題

しかし、園で行われる行事のほとんどは、基本的にデジタルとして保護者に子どもの姿を伝える手段です。こんな運動ができるとか、こんな歌が歌えるとか、今の子どもの姿を伝えます。もちろん、保護者は、その姿にわが子の成長を感じ、感動するかもしれませんが、そこには結果としての姿だけを見ていることが多いような気がします。

その運動ができるようになるために、どれだけ練習をさせられてきているのか、こんな絵を描くために何回絵を描き直しさせられているのかには思いがいきません。しかし、子どもの成長にかかわったり、子どもの将来に影響するのは、その過程が重要なのです。

### ■「成長展」の試み

私の園では、毎年行事の中で最後の締めくくりとして「成長展」が行われます。

15年ほど前まで私の園で行っていた「作品展」や「展覧会」では、子どもが描いた絵や作品を展示していましたが、その絵や作品は、ある時期の子どもの姿を表し、デジタルとして保護者に成長を伝えます。

その1日のために、子どもたちは大変です。見栄えのよい？ 作品を子どもにつくってもらわなければならないからです。

絵を描かせたり、工作をさせたり、共同作品をみんなで作ったり、そのほか何かないかと考えます。小さい年齢のクラスでは、大人の思うとおりの作品をつくってくれず、勝手に殴り描きをします。それを、いかにも作品のように見せる工夫をします。

しかし、保育はどんな絵を描いているかではなく、どのようにしてその絵が描かれてきたかという成長の

過程の世界なのです。園生活の中で、子どもの一番立派な作品は、子どもの成長した姿ではないか、ということに気がついたのです。

何も、ものとしての作品だけでなく、1年間でどのくらい身長が伸びたか、体重がどのくらい増えたか、何が食べられるようになったか、どんな本を読むようになったかなども、一つの子どもの成長の姿という作品ではないかということを考えました。そのアナログの世界を、どのように保護者に伝えるかの取り組みが、年度末に行われる「成長展」なのです。

成長展での展示は、たとえば、全園児が自由画を年間3枚描いていますが、それを縦に並べます。そして、その成長を保護者に意識してもらうために、クイズ形式で、回ってもらいます。普通は、絵の下のそれを描いた子の名前が掲示されますが、それが隠されてあって、保護者に、わが子の絵がどれか当ててもらいます。

その中で、5領域に関する部分は、受付で手渡したファイルに書き込んでいきます。1回目で当たれば、5点、以後4、3点と下がってきます。それをグラフ

にしていくことで、わが子のどの領域をあまり理解していないかを振り返ってもらいます。

また、わが子の成長だけでなく、ほかの年齢の子の成長も見てもらうために、各コーナーを回って、その場にある資料を集めることによって、1冊のテーマに沿った図鑑になります。それは、0～8歳児（学童クラブの子も参加）までの発達を見通してもらうためでもあります。

### ■保育の共有としての行事

クイズ形式で子どもの成長を聞かれるので、毎年、予習をしてくる保護者がいます。それも、一つの目的でもあるのです。

前日に親子で、1年間で振り返る会話をしている姿は、ほほえましいですね。また当日は、職員と、子どもの成長を中心にした話題で会話が弾んでいます。

親子、職員が一緒になって、子どもの成長を喜べるような行事なのです。

（藤森平司●東京・新宿せいが保育園園長）

## 実践 運動会行事を例に、幼稚園とのちがい

私事ですが、15年間くらい、数々の幼稚園に出向いて子どもたちの体育指導を行ったり、ビデオ片手に、保育を撮影しながら、後で先生たちと振り返りを行う園内研修に従事してきました。

このような経歴からいえることは、『子どもたちのために』という大義は同じであっても、実際に現場で力を注いでいることは、保育園界と幼稚園界とは、かなり異なる実態が存在するという事です。

.....★.....★.....★.....

運動会を例にあげてみます。私は、5歳児だけで100～200人、もしくはそれ以上いる幼稚園と数多くかわってきました。

たとえば、リボンなどの手具を使って《マスゲーム》をする場合、全体が4つ、もしくは8つの円になったり、8～16本くらいの縦列になったり、いわゆる隊形変化が“見所”の1つになります。その善し悪しは別にして、私の役割は、いかに円も線も描かないで大勢の子どもたちが、自分自身の力量で、より素早く適当な間隔を保って、円形になったり、縦列になったり



きるように指導するかということでした。

白線や水線を描いてしまうと、子どもたちは何も考えず、ただ線に乗っかるだけで、それでは意味がないと訴え、“ストップゲーム”の要領で、自分たちだけで一定の大きさの円形になる経験、間隔を保って縦列になる経験を、より主体的に楽しみながら、繰り返して、身につけることが保育の目標になりました。

《組体操》も同様です。“オオギ”などの形をつくる活動とは別に、どの位置に素早く移動できるか、その

部分だけをゲームにして取り組んできました。

いずれの場合も、工夫を凝らし、手際よく展開しないと、100名を超える子どもたちの意欲は失せて、ヤラセになってしまいます。私も先生たちも、そこに専門性（保育スキル）を感じながら取り組んできました。

……★……★……★……

一方、現在の自園の定員は60名で、「保育者の姿なし」がコンセプトです。

2～4歳児のかけっこの「ヨーイ ドン！」から、ゴールテープの係りを5歳児が担います。司会も、担当の子どもたちと相談しながら原稿をつかって、子どもたちが“見所”を含めてアナウンスします。

4歳児は14名で“2人の協働”をテーマに、1人では持ちきれない大きなダンボール（4面にそれぞれ絵が描いてある）を3つ重ねて、2人で一度壊してから運んで、別の場所で再構築するという活動で、どうしても、その2人なりの協働が必要になります。

そのかわり合いが“見所”になるので、競技種目にする意味がなく、1チームだけで7回繰り返しました。さまざまな協働のパターンが見られ、新宿せいが保育園の「成長展」的というなら、これは明白な「アナログ」で、しかも個ではなく、関係性の一つの姿（育ち）を見ていただくことになる、といえるでしょう。

……★……★……★……

5歳児の《組体操》は、14名中2名が輪番で、幼稚園における先生の役割を担います。1人は、形の指示を出し、1人は笛を吹きます。ですから、実際、動くのは12名です。2人組の形も3人組の形も、本番でも相手を決めずに、1回、1回、新しい仲間を探してから形をつくります。その“仲間探し”が大きな見所になります。

昨年のエピソードですが、5歳児の1人の男の子が開始と同時に体調不良になり、退きました。12名ですから、2人組でも3人組でも6人組でもうまく割り切れるはずだったのが、そうはいかなくなりました。そこで、5歳児のある子が咄嗟に園児席に行って、4歳児のA君をひっぱってきました。A君は、5歳児がおけいこする姿を懂れて観ていたようで、その事実を5歳児の子どもたちは把握していたので、A君をひっぱりだしたのです。結果、第三者的には、そこに4歳児が混じっているとわからない内容になりました。

このような子どもたちの姿も、少人数だから果たせ

ることです。もしも、4歳児、5歳児が100名を超える中での運動会なら、私という人間は同じであっても、大きな集団の中で自分のポジションを感覚として理解する類のねらいを立てて、子どもの育ちを後押しする実践を考えるでしょう。

……★……★……★……

1年齢複数クラスが一般的な幼稚園と、1年齢1クラスが一般的な保育園とでは、子どもの力の発揮の中身も、保育者のリキを入れる部分も大きく異なることが自然です。子どものためにお互いの思いは「幼保一体」でも、具体的な手立てにおいて、大きな違いを出さざるを得ないことを理解したうえで、「幼保一体化」を重層的に議論していただきたいものです。

（片山喜章●横浜市・もみの木台保育園園長）

## 編集後記

### ◎幼保一体化を機に

新政権が「幼保一体化」を打ち出したことで、私たち保育関係者は、ずいぶん戸惑っています。しかし、逆にこれを機に、さまざまな議論をする必要に迫られたことも事実です。

今、本研究機構で取り組みはじめた「日本の子育て・保育のグランドデザインについての研究」において、わが国の子どもがおかれている現状に改めて目をやり、保育園の役割や本来の保育についても、少し高所を立てて“再確認”する機会を得たと思います。幼保を止揚した「ソーシャルインクルージョン」や「原点としての福祉」に今一度、立ち返る必要性を感じます。

制度論者がいう、年齢区分＝0～2歳が保育園で、3～5歳は幼稚園という考え方は、子どもたちが置かれている現状を認識し、これまで保育園や幼稚園が果たしてきた役割を鑑みれば、机上の思考である、といわざるを得ません。

一方、新宿せいが保育園の「作品展」でも「展覧会」でもない「成長展」、つまり成果＝結果だけを見てもらうのではなく、過程を見てもらう取り組み、これは、まさに子どもの育ちを保護者と共有する確かな手立てであると思います。

「幼保一体化」が打ち出されたことで着手した「グランドデザイン」の研究。これは、日本の就学前の子どもたちを大所・高所から見据えた大事な取り組みにちがひありません。一方、子どもの育ちを保護者と共有する手立てとして発想された「成長展」。大局に立った「広い視点」と現場での「地道な改善」の2つが同根であることからえることができるなら、「幼保一体化」を社会自身の成長の姿として保育園関係者と幼稚園関係者で共有されるだろうと思います。

（片山喜章●横浜市・もみの木台保育園園長）

### ◆問合せ

社団法人全国私立保育園連盟  
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会  
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10  
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879  
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>  
E-mail [ans@zenshihoren.or.jp](mailto:ans@zenshihoren.or.jp)